



都留高等女学校校門

終戦を二日後に控えた、昭和20年8月13日の早朝、山梨県の東部に位置する大月町は米軍艦載機による空襲を受けました。

多くの大月町民が犠牲となり。なかでも都留高等女学校においては24名の女学生と教職員が、軍需工場興和航空の防空壕においては都留中学生9名が亡くられました。

この時の体験談および、その当時の話しを紹介いたします。

大月にも空襲があった

深澤 眞

昭和20年(1945年)8月13日。満州事変より足かけ15年にわたって続いたアジア太平洋戦争が日本の無条件降伏という形で終わるわずか二日前私たちの住む町大月がアメリカ軍の空襲を受けた。

なぜ大月は空襲を受けたのであろうか。多くの人が疑問を持つ。山に挟まれたこんな小さな町がどうして狙われたのだろうか。

マリアナを基地としたB29は京浜方面を空襲する際には、富士山を目標に駿河湾より進入し、桂川沿いに東進して大月上空を通過して爆撃を行った。コース変更点にあたる大月の地理には詳しく、眼下に見える道路や鉄道の合流点に栄える市街地が交通の要衝として政治的・経済的にも重要な地点であるという認識はあったはずである。さらに、この狭く小さな町には、大きな構造物がひしめいていた。線路の北側には能登精機(現大月東中学校)、興亜航空(現興和コンクリート跡地)、大月産業(現住宅地と大月倉庫)があり、南側には都留中学校(現都留高等学校)、大月東国民学校(現大月東小学校)、都留高等女学校(現大月短期大学及び付属高等学校)があり、市街地の東のはずれには1908年に竣工した日本最初の長距離大容量送電を果たした駒橋水力発電所、そして町の南側にそびえる林宝山の裏側には発電所に引き込む水路がある。また軍事施設としては、能登精機の東対岸の美堂(現みどう団地)には陸軍電波探知所があり、都留中学校の東対岸の結び山には陸軍防空監視哨があった。

当時の日本の工場では何らかの形で兵器に関わるものを生産し、また学校も校舎の一部が軍需工場の一部として使われ「学校工場」と呼ばれていた。アメリカ軍にとってもこのことは周知の事実で、当然、これらの大きな構造物が軍需工場であると認識されれば攻撃されることになる。

また、発電所等は戦略上の重要な攻撃目標であり、それに加えて水路を戦闘機を引き出すための誘導路、そして所々にあるトンネルは戦闘機を隠す掩体壕に見えたのかもしれない。林宝山に数十発の爆弾が投下されたという事実が、その可能性を強める。

これらのことにより、戦略上攻撃すべき都市としてリストに載せられていた可能性が高く、空襲を受けるべくして受けたのではないかと考えられていた。しかしながら、B29の攻撃目標として作成された都市リストには大月の地名はなく、また、「空襲目標情報地域調査」には県内の発電所の一つとして駒橋発電所だけが記載されているだけだった。アメリカ軍にとって、大月は、リストアップされるほどの戦略上重要な都市ではなかったということである。

では、リストアップされていないのに、なぜ空襲されたのだろうか。

その理由は、艦載機であるグラマンの母艦が所属するアメリカ海軍機動部隊の「航空機戦闘報告書」に書かれていた。これによると、「大月空襲」を行ったのは、第38機動部隊に属する3つの空母から発進した合同部隊であり、当初の目標(primary target)であった川崎の東京芝浦電気が雲に閉ざされていたために投弾できなかったため、どこか他に爆弾を投下できる場所を求めて雲上をさまよった末に、たまたま雲の隙間から見えた工場群とダムを攻撃することにしたと記されている。

その雲の隙間から見えた場所こそが大月町であったのである。

つまり、爆弾を落とす場所は、それらしき目標物がある所だったらどこでもよかったのである。確かに、ダムや大きな構造物は、彼らを惹きつける要因だったかもしれないが、たまたま大月町が雲間から見えたために、「捨てる」も同然に爆弾が投下され、たくさんの人が亡くなるこの空襲が行われたのである。

もしも、この日、この時間、大月が雲に覆われていたら、おそらく大月は空襲を受けることはなかったろう。

さらに、「大月空襲」前日の8月12日には「国体護持」のみを条件としてポツダム宣言を受諾すると日本側の提案に対して、あくまでも無条件降伏を要求する連合国側から天皇の地位及び権限についての回答があった。天皇及び外務省は連合国側の示す通りで受諾の意を決めていたのだが、陸海軍ともに「国体護持」に固執し、政府としての意見がまとまらず、時間を浪費している。このことは、「航空機戦闘報告書」にも、出撃前に中止命令と、出撃命令があわただしく交互に出されたとの記載が見られる。

ここで、もう一つの「もしも」が加わる。

もしも、統帥部が「国体護持」に固執せず、あるいは天皇が「聖断」を下し、日本が12日にポツダム宣言を受諾していれば、おそらく大月は空襲を受けることはなかったろうにと。

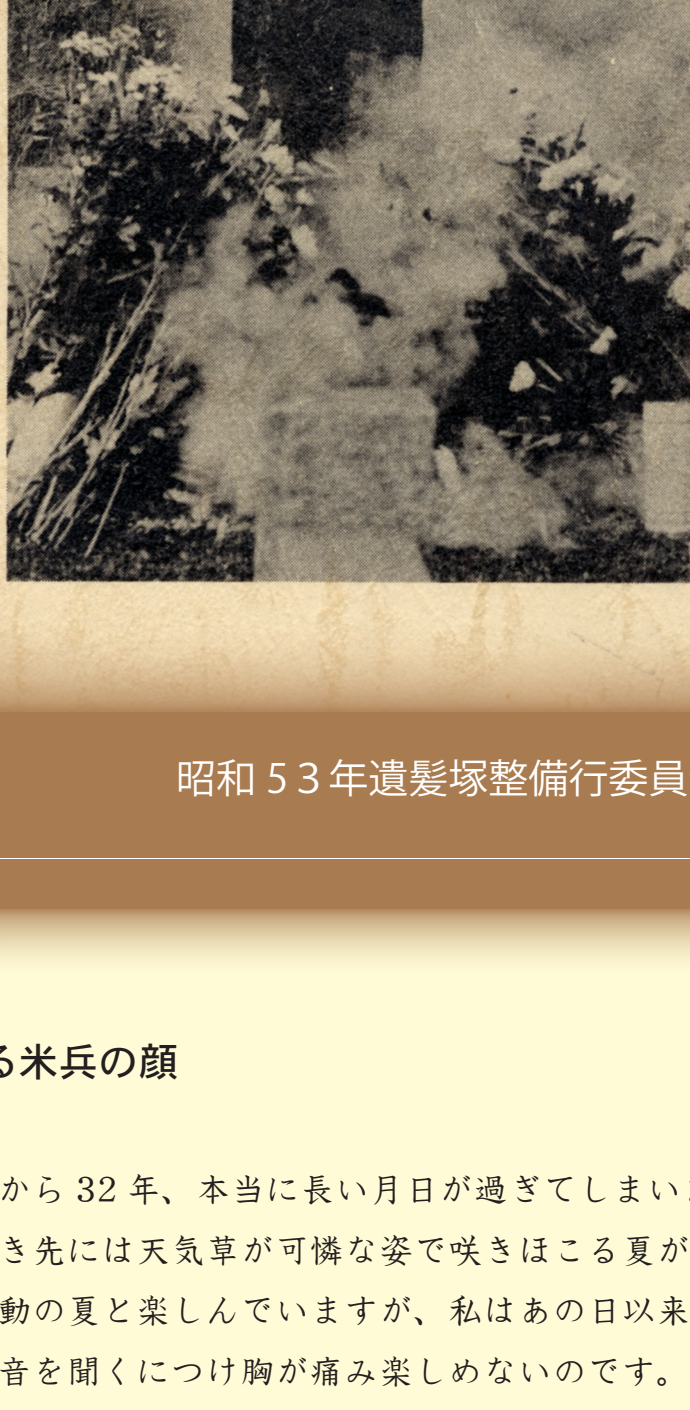
わずか終戦二日前。人の手の及ばない気象条件と、軍部を中心とした保身をはかるために遅れた判断の二つが重なり、大月への空襲が行われた。どちらか一方の「もしも」が現実にあつたら、誰一人も戦災による犠牲者を出すことなく終戦を迎えることになっただろう。この事実には大きなやるせなさを感じる。

既に64年を経過し、空襲を体験した大半の人は鬼籍に入り、町並みはその跡すら残していない。記憶はますます風化し、そして記録さえも曖昧のうちに片隅に追いやられ、過去のものとして葬り去られそうな感がする。

「大月空襲」は多くの尊い人命を奪った不幸な出来事である。不幸な出来事はそのまま風化し、このまま忘れ去られたほうがいいのかもしれない。しかし、「戦争」を考えるにあたって、この不幸な出来事は、身近で貴重な財産となる。負の財産である「大月空襲」を忘れ去るのではなく、次代に「戦争」と「平和」を考えるための正の財産として伝え、戦争は尊い命を奪う愚かな行為であることを、「大月空襲」を通してともに考えることこそ、その悲惨な状況の中での死に対し「平和の礎」としての意義を与え弔うことになると同時に、われわれが再び過ちを繰り返さないことにつながると思う。

み雪に捧ぐ

都立高女空襲体験記



昭和53年遺髪塚整備行委員会 編集発行

眼に残る米兵の顔

武藤百合子（女21回）

あの日から32年、本当に長い月日が過ぎてしまいました。今年も赤いサルビアの花が咲き、のき先には天気草が可憐な姿で咲きほこる夏がやって来ました。人々はレジャーの季節、躍動の夏と楽しんでいますが、私はあの日以来夏が来ると、又平和な夏空を飛ぶ飛行機の爆音を聞くにつけ胸が痛みあせめないので。

運命の8月13日は、お盆の入りの日でした。暑い太陽の照りつける中を、お弁当（大根、人参を少しばかりの米の中へきざみ込み塩味少し）を救急袋の中へ詰め込み、防空頭巾を肩に、又その時の服装は、祖母にお願いして一枚着物を買い2つ上の姉が作ってくれた防空服でした。出かけるときに母が此れが精一杯の御飯だなんて情けないね、せめて漬物だけでも良いから白い御飯を子供達だけでもお腹一杯食べさせてやりたいと言った言葉が忘れられません。

中野河原を30分歩き、山麓線（今の富士急行線）に20分ゆられ大月駅に着いた時には、たしか空襲警報が発令されていたと思います。電車から降りた私達はかけ足で学校に向かいました。当時学校工場での仕事は、小さい落下傘のようなものを縫っていたのですが、何に使われたのかは秘密でただただお国のためと与えられた仕事を一生懸命していたのです。爆撃にあった日も一枚でも多くと意気込んで学校に行ったのですが、会社の外を防備するように命ぜられた私達3人（大島陽子さん、折山元子さん）は奉安殿の近くの『まが玉池』のほとりにあった1本のさるすべりの木の下へ陣取ったのです。おしゃべりするひまもなく爆音、3人して空を見上げると、敵機が大月の空を旋回しはじめたのです。今日は大月がやられるのかしら、まさかこんな小さな町がと思った途端、上大月のほうでドカンというものすごい音、もう一度上を見ると岩殿山より低く、機体の星のしるしや乗っているアメリカ兵の顔まで見えるのです。恐ろしいと思ったたん、校舎の中央にすさまじい音をたて爆弾投下、急いで地面に伏せたのですが、校舎がばらばらにやられたので、材木の破片や石ころが、頭の上や背中に雨のように落ちてきました。おそろおそろ顔を上げてみると、土ぼこりで一寸先も見えず、すると今度はバリバリバリと機銃掃射の音、もうだめだと思いながらも防空頭巾で頭をおおひ必死でした。3米程離れた公孫樹並木はやられたのですが、私達のかくれたさるすべり1本には銃を向けなかったのでしょうか、ああ助かったのだと横を見ると先刻迄いた折山さんの姿が見えません。それでも池のほうを見ると、泥水の中へまるで蛙のように丸くなって入っているのです。お母ちゃんと泥まみれの折山さんの泣き顔にも笑うこともできませんでした。立ち上がり校舎を見ると二つにちぎられた無残な姿、壊れた校舎の下からは悲鳴と泣きさけぶ声、ただ茫然と立ちすくむだけでした。我に返った私は速く友達を助けなければと思ったのですが、何の道具もなく力もない私、何と不甲斐なかったことか。そのうちに大人の人達が勢よって来て、ぐったりした恩師や友達を運び出しました。その姿を見てあまりのことに言葉もありません。その人達はやがて学校近くの進士病院へ収容されてゆきました。すると又空襲警報発令、裏山に非難するよう命ぜられ一寸の間姿をかくしていたのですが、敵機も来ないので山を下りた夢中で駅に向かったのです。すると駅員曰く『山麓線は不通だよ』と、仕方なく、校舎の下敷きになっただけでも幸いにも傷一つ負わなかった志村竹子さんと共に歩くことにし家途に着いたのです。ぼつんぼつんと空襲の恐ろしさを話しながら、2時間余歩いたのに疲れも知らなかったのは若かったというよりも、あまりの恐ろしさのためだったからだと思います。いよいよ私達の村三吉村へさしかかった時、志村さんの祖父（お父様は戦争で亡くなられた）と私の父が、都立高女全滅との報を聞き国民服にキャハンを着け遺体を引き取りに出掛けるのに会い、それこそ嬉しさでお互いにしばらくは言葉もありません。『お前達無事であったか』の一言。真赤な目をした今は亡き二人の姿、今尚脳裡に焼き付いています。

考えれば考えるほどやさしいのです。あと二日で戦争終結、平和の日が来たのですから、しかし此れが戦争の非情、残酷の本質でしょうか。あれから世界のどこかで武力の争いは起きていますが、幸い全面戦争はありません。そして平和憲法を制定して不戦の誓いをした私達の国は、あの日をさかんに戦争がありません。若くして散った級友達の霊が守ってくれているのでしょうか。あの日の悲惨を思うとき、私達はもうどんなことがあっても、戦争だけはしないように、どんな苦労もいとわないうが、戦争だけは反対しようと思うのです。

八月十三日

相川 竹子（女21回）

不気味な、ウウ……ググ……B29の急降下の音、急降下だ『押入れに入ろう』誰かの叫びにつられて宿直室の押入れに、なだれ込んだ。山麓組の数名、「ドカンパーバン」の音と一緒に柱がたおれ、壁土が「ザザザ…サー」とくずれ一瞬の間に、暗闇の地獄の世界、誰と誰だった記憶がない。手も足も体も一寸も身動きができない。もちろん目をあけることもできない、目も口もひらくと壁土が入ってくるのです。土で石膏の如くにかためられた土に灼熱の暑さ、次第に手足の先からしびれ痛んでくる。壁土の泥臭さ、血なまぐさい息（いまだにいやな思い出の臭いとして残っている）「痛い」「くるしい」「オカアサン」「ウウウウ」「くるしい助けて」音にならぬ声、苦しさが全然声にならない人「みんながんばろうね」「しっかりしようね」とお互いに元気づけていたものの、次第に声を出すことすらくるしくなってきた。

そんな時「君が代は千代に八千代に…」とかすかに、でもろうろうと流れた国歌、又「はっ」となって、しっかりしなくてはと思ったが意識がもうろうとしていた。何分たっただけであらう。いや何時間もの様な気がする。あらあらしい人の気配、シャベルの音に、気がつく。「バカ人間が埋まっているんだ。シャベルじゃダメだ」「手で掘れ」「ここぞ」「こっちにもいるぞ」「足が出たぞ」柱をのぞき、梁をよけ土を払いのけられ、足が出、頭が出、体が出された。出された世界は、何とみじめな世界、埋まった1米先から大きな穴がポカリ、2階建ての校舎がもぎとられてその穴の中に、黑板、机、椅子、そして人となだれこんでいるのだ。

やっと何分かして立ち上がり、フラフラと、裏口の方へ、かけつけて来た人に、「大丈夫か」「けがは」「早く進士病院へ」などおそろおそろ顔をのぞきこまれた。どうも凄惨な顔だったらしい、汗と土と血の泥化粧のおぼけだったらしいから

進士病院の板の間、何でも人のすわれる所は全部ケガ人、泣き泣き血だらけの足を手をおさえる人、息絶え絶えにタンカでうなる人、意識なく死んだ様にふす人、あまりの凄惨に中に入るに入れず、とても自分のかすり傷、打ち方程度では傷の部類には入りそうもなかった。

ひときわ高くと空襲警報、けたたましい合図に裏山に一目散に逢るこし畑に逃げこんだ。その間誰と一緒にいったのか、全然覚えていない。又敵機がきたのだったかしら？ハッと我にかえった時、大切な救急袋も、防空頭巾もないハダシだったのだ。学校へもどき、黒い鼻緒の下駄をはき、救急袋を探して現場へ戻った。フラフラと探して歩いた様な気がする。そしてあの角の部屋へ1名、2名、何名か、白布をかけられて、一瞬の間にあの世へ去った友が、床の上へ整然と、安置されていた。この黑板に安置順に名前が手書きで、父、母の引取りを待っていたのだ。ポーンと立ちすくみ信じられず、思わず手を合わせ、合掌した。

岩田さんが私達の押入れへ最後に逃げ込んで、倒れた柱の下敷きで打たれてなくなりました。私達をかばって下さったかの様に。それから、来る日も来る夜も、急降下の音と、なまぐさい血壁の臭いにおびやかされて、床に伏し病みました。

八月十三日が来るも、毎年毎年、何かにひきつけられる様に独りそと遺髪塚にまいりました。今日あるのも、皆様のぎせいの御陰と、なくなられた方々の御冥福を祈ります。

八月十三日の思い出

佐藤和枝（女21回）

それは、終戦を2日後に控えた昭和20年8月13日の朝登校して間もなくの出来事だった。

あれから時は流れて、その時亡くなられた方々の33回忌を迎え、遺髪塚も立派に整備された今、亡くなられた方々への追悼の思いもこめて、記憶に残っていることを書き記したいと思う。

それまで空襲の恐ろしさを知らなかったが甲府、八王子が爆撃され、そろそろ危ないと感じてはいたものの、まさかあの、のどかな山間の町がねらわれるとは未だ誰も思わなかったことだろう。

私は当時3年生で上級生のほうであったから、警報下でも登校しなければならなかったし、服装も長袖のブラウスにモンペをはき、腕章（なんと書いてあったかどうして思いつかない）を巻いていた。

そのころは、登校したといっても勉強をした訳ではなく、学校工場でパラシュート作りをしていた。上級生は、空襲警報下でも防空壕に入れなかったように記憶している。あの爆撃投下の直前まで、私は一番被害の大きかった玄関にいたが、確か10分位前に友達の小林桃江さんに誘われて、裏側のトイレのほうへ移動した。

なぜ移動したのか、はっきりした理由もなかったように思うが、これが運命の分れ道というのだろうか。

それから間もなく敵機の襲撃となり、いつにない低空飛行だと思った途端、異常な衝撃を感じ、あとは何が何やら全くわからなくなってしまった。

気がついたとき、私は土砂にたたきつけられ生き埋めになってしまっていた。その土の重たいこと、いくらもがいてもびくともしない。《助けてー》と呼べど叫べど、その声が誰に聞こえたのだろうか。私は、もうこれで自分の命も終わりだと思った。しゃがんだ格好で土砂をかぶったせいか、息がつかまって絶えそうに苦しい。

そういう中で、夢うつつに「閻魔様」の前に額づいている姿を見た。

どのくらい時間が経ったのだろうか、ふっと光が射し込んで来たとき、私は助かったと思った。その時、どなたが助けて下さったのか無我夢中で記憶がないが、兵隊さんと無事だったお友達が掘り出して下さったものと思う。

あまり苦しかったので1時間も埋まっていたような気がしたが、実際は数分ぐらいたったらしい。そのような状態で長く生きていられるはずがない。

助けられて間もなく、再び敵機が襲撃するかもしれないと言うので、裏山のほうへ逃れることになった。

しかし、私は貧血気味で頭がぼんやりとして歩けないので、もうどうなってもいいからこのままここにしようと思った。その時「そんなことを言ってはだめ、せっかく助かったのだから」と私を励まして、山のほうへ引っ張って行って下さった方は乙黒さんではなかったかと記憶している。

やがて警報も解除になり、山を降りて来たところで、私の身を案じて迎えにかけつけてくれた母と叔父に出あった。気がついてみると、お弁当箱はべしんこにつぶれ、モンペはずたずたになって、土の衝撃の凄さを物語っていた。

それから2日後の15日が皮肉にも終戦の日となり、終戦がもう少し早かったら、私の親しかった友、浅井満智子さん・土屋綾子さんを初め尊い20余人の命が助かったのにと、口惜しくてたまらなかった。

その後、卒業してから東京都厚生省の外郭団体に入社した私は、昭和28年に勤務先の年1回の親睦旅行で群馬県の伊香保温泉にバス旅行をしたが、榛名湖へ向かう途中私の乗っていたバス転落するという事故にあった。このときも、命運があるというのか、怪我もせず助かった（亡くなった人はいなかったが、ほとんどの人が負傷した）それで、日常辛いことや嫌なことがあったときには、空襲で生き埋めになったこと、バスの転落事故の九死に一生を得たことを思い出し、生きていることに感謝して、嫌なことは忘れるようにしている。

生き埋めの体験も、私にとってはこのように役に立っている。

最後に、前記小林桃江さんと乙黒さんにお礼を申し上げ、亡くなられた方々のご冥福を心からお祈りしてこの稿を終わります。

「八月十三日」

秋山三八子（女21回）

私たちの脳裏から離れたいあの一瞬のできごと、空襲警報発令の最中、学校工場でアイロン係をしていた私たちが手を休めたら次の襲撃をする人たちが迷惑するだろうとの責任感から登校した八月十三日、その日はいつもの空襲警報とは異なって敵機（B29）が学校の上空を何度となく飛び交い空中からだんだん下がってくる爆音が言いようなない恐怖心をかきたてました。

第1第2被服室（裁縫室）を使っただけの仕事だったので、運動場より階段下に避難し数分した時でした。最初機銃掃射でバラバラバラバラ豆でも炒るような音が屋根の上に降ってその音が消えたたびと時階段下に避難していた人達が、正面玄関の方や講堂の方へと左右に散り散りばらばらに逃げ出しました。後で考えるとこのときが運命のわかれ道になったようでした。私も講堂よりのトイレ際に植えてある樫の木の下に、防空頭巾をかぶって目を手でおさえて地面にふせました。その瞬間でした。敵機がなんと表現してよいかわからない無気味な音を立てて降下してきて、正面玄関の辺に爆弾を投下したのでした。その時地面は大きく上下にゆれました。

一瞬母にすがりたい気持ちでいっぱいでした。それからは気を失い気がついた時には下半身埋まっていた。隣にふせた人はあまりの怖さで名前も覚えていませんが、すっかり土をかぶって生き埋めになっただけ、息をする度に土が動いていました。急いで掘り起こしてあげると「今夢を見ていたわ、ここはどこ」と言っていました。その防空頭巾の縫い目はさけ、土だらけの顔がぞっとするようでした。それから4・5人で運動場の端に掘ってあった防空壕に逃げてぶるぶるふるえながらじっと我慢していました。家族のものは学校にかけつけ、進士病院の遺体安置所で1人1人対面しても姿が見当らず、死んだものと思いこんで大騒ぎをしていたやさき、1里の道を歩いてやっと家にとどろつききました。

いっしょにアイロン係をしていた三田高女からの疎開者浅井満智子さんと友達になりました。ユーモアに富んだとても明るい性格の持ち主で、お母さんにとってはかけがえのないただ1人の娘さんのようでした。たしか階段下までは一緒でしたが、正面玄関の方へ逃げたのが運命の分かれ目になりました。その時より自分達が生きること、精一杯でも、何もしてあげられず戦争犠牲者の方々に対しほんんとにすまなく思っています。と共になんかむいもないことがまことに残念でなりません。私になれれば生きているの良しところしか見えないうが、この級友の1人1人を思い浮かべるとほんとに気持ちのよい人ばかりで、私のような者が生き残って申し訳ない気持ちで一杯です。そしてめぐりめぐって33年を迎え「友よ安らかにお眠り下さい」とくりかえしています。自分でかき自分で読みかえしながらあの時がありありと思ひ出されてきて、胸が高鳴り涙がとめどもなく流れてどうすることもできません。

大月空襲体験記

終戦二日前 昭和20年8月13日大月空襲の朝

カンナの花に憶う

森嶋芳彦（一高2回）

終戦を前にした昭和20年8月13日、大月の町は米艦載機グラマンF6の空襲を受け、中学生、女学生達が若い命を散らしていった。あれから45年、激動の昭和が終わり平成へと改まった今、静かに昭和を振り返ると、そこに去来するのは戦時下の純情な少年時代の忍苦の体験である。若き青年将校へのあこがれ、少年飛行兵への夢、そして決戦へのかげりが色濃くなった時の緊張感と悲慘さ、戦争により肉親を、多くの先輩を、そして友を失ったことを思い起こしている、悲壮なる「海ゆかば」そして「ああ紅の血は燃ゆる」がバックコーラスのように脳裏をよぎる。人類の永遠の平和を願い、美しい郷土を守るために、戦争体験者として、戦争を知らない人々への語り部となり、また、正確に記録保存をする役目があるうかと思う。そして、それを自らの昭和史として残していきたい。

19年、私達は六月町の県立都留中学校へ入学した。その年の6月の夜半だと記憶するが、空襲警報発令と同時に学校の警備へと4キロの道を急いだ。次兄も最上級の5年に在学しており、二人で灯火管制の真っ暗な中を出かけたが、雨のやんだ後の道は黒く、足さぐりで歩くような状態であった。笹子川辺りまで行くと螢が飛んでいた。兄は螢を採り、手ぬぐいに入れて手に持つととても明るく、ようやく足早に歩けるようになった。だが学校に着くと同時に空襲警報も解除になり、出勤した確認を先生にしてもらい帰途についた。その兄も学業半ばに、陸軍特別幹部候補生(二期)として中部第129部隊に入隊した。兄が志願書を書いたのは家族が寝静まった夜半、血書をして提出した。その時、父も母も黙ってうなずいていた。上吉田の実家から出発した兄を、私と妹は真木の笹子川原で列車の通るのを日の丸の旗を振って見送った。

20年6月の農繁期の勤労奉仕から引き続き、7月になると大月の興亜航空に勤労学徒として動員された。興亜航空では飛行機を造っていたが、板金部と木工部があり、木工部では木製の飛行機を造っていた。誰言うともなくこれはおとりの飛行機で、空襲警報になると本物の飛行機は空に退避し、木製のものはおとりとして飛行場に置くものであると。

物不足の時代、制帽も学帽の者あり、戦闘帽の者あり、疎開により転校して来た生徒らは徽章もなく、布にゴム印を押したものを縫い着けていた。ある日、一日の作業を終えて退社する時、正門において会社の守衛により服装検査が行われた。飛行機のジェラルミンの切れ端を徽章の型に切り、持っていた者がその場で取り上げられたあげく殴打された。

その翌朝のことである。出社すると学生は職場に就かず広場に集まれとの上級生の命令であった。やがて当時剣道の達人と言われていた櫻井文三郎先生が見えて壇上に立たれ、昨日の状況を話されたのは絶対許せない。会社の責任者の謝罪があるまで就業していいのに殴打事件に及んでの絶対許せない。会社の責任者の謝罪はなまじで就業していいよ。」と言われた。この事件はその日、会社側の謝罪により一件落着いたがその時の先生の、学校と生徒の立場を思う心情に深く心を打たれたのを、今も忘れることはできない。学校には羽織、袴で登校されることが多く、文武両道に秀でた超一流の先生であったが、戦後いつとはなく去って行かれた。

興亜航空に動員されていたのは、2年上級の4年生と、私達2年生だったが、後輩指導のため卒業されていた三名の先輩もいた。また海軍の兵隊も何名かいたが補充兵が多く、見るからに栄養不良で体力がなく、若い下士官に殴られていた。そんな人達が「学生さん、なんでもよいから食べるものを家から持って来てください。腹がすいてとてもたまりません」と頼まれ、いり豆を持って行ってやり、たばこをもらって帰ったこともあった。

毎日のように発令される警戒警報、続いての空襲警報に仕事を中断しては山林に防空壕に退避した。退避中に先輩の一人が私達を集めてよく歌を教えてくれた。その歌は軍歌もあれば哀調ある叙情歌もあった。先輩が特に好きな歌は「北上夜曲」であった。この歌は昭和36、7年頃、歌声喫茶で流行しはじめたが、当時、東京で勤めをしていた私は、懐かしいこの歌を歌いたくて幾度か歌声喫茶に通った。今もこの歌を聞くたびに学徒動員時代のことが思い出されてならない。

8月13日の早朝、警戒警報が発令されたが、いつもどおり出社した。会社の通用門をはいると同時に空襲警報が発令された。会社の敷地内の溶岩地帯には馬蹄形に掘られた防空壕が九箇所あったが、一番手前の豪が私達の班にあてられた場所であった。

しばらく中にいたが、なぜか不安になり、友人4人とそこを飛び出し、花咲の友人の家まで逃げた。まもなく敵機の襲来、爆撃と機銃掃射のすさまじさに私達は押入れにもぐって布団をかぶっていた。その間どのくらいの時間だったか記憶も定かでない。静かになったので外に出て見ると、大月の町は空一面褐色に煙っていた。

この空襲により私達のいた防空壕で7名、ほかの場所で上級生1名、海軍の兵隊1名の尊い命が奪われ、そのほか多数の負傷者も出た。翌14日高月橋の下の桂川畔で9名の遺体は茶毘に付された。この時の空襲で都留高女においても20名の女学生達が犠牲になっている。そして翌日15日正午、敗戦を国民に告げる「玉音放送」により戦争は終わった。

数年前のこと戦跡を訪ねて見ると、草に覆われ入り口は埋まっていたが、そのあとには在りし日のまま残っていた。近くにいた人にその当時の話をすると「そうですか、都留中の生徒さんでしたか。あの当時、白線帽の都留中生はあこがれはしたもののとても及びもつかず、私など雲上の人でした」と謙虚な話をされた。

家に入るものは何を食べていてもよいと、弁当だけは米のご飯を詰めてくれた母は、私が無事家に帰った時、泣いて喜んでくれた。その母も昨年の秋、92歳で天国に召されていった。月に一度くらいであったが実家を訪れ、よくあの当時の話を交わしたが、今はその術もない。

今年の夏も我が家の庭にカンナの花が真っ赤に咲いている。あの空襲から無事帰った時と同じように。

「都留市民の十五年戦争（平成4年）」より

戦争体験

天野安子（高1回）

私の戦争体験は父の出征から始まったのです。小学校三年の夏、昭和十六年七月三十日に家族だけに送られて甲府六三部隊に入隊。その後十月三十日に弟が生れる。父親も弟も対面することなく、お宮参りに家族で撮った写真を送り互いに写真で見るだけでした。本当に父親に抱かれることも又抱くことも出来なかったのです。十二月八日大東亜戦争となり十七年の二月なかば、「戦地へ行くので面会に来るように」と通知があり、母と私の二人で昼食を共にし、その後満州へ行き、七月二十日現地で戦病死したのです。これからは、祖父母と母と子供4人の7人家族の大変な生活が始まったわけです。母は看護婦の資格があり、それを生かして、又、産婆の資格を取って村役場へ保健婦として勤め、産婆もやって何とか生活して来ました。母は子供には高等教育までさせてやりたいと一生懸命働きながら四人の子供を高小まで出してくれました。三十三才という若さで夫をなくした母、今思うと本当に大変だったなああと…苦労の大きさを感ずます。

ところで今度は、小学校～国民学校と変わり、昭和十八年からは、学校生活も毎日防空訓練やら、出征兵士の家の勤労奉仕作業にと、殆ど勉強はせず、お天気の悪い日は授業といったような日々でした。小学校六年生になり戦争も激しく夜は電燈も外に漏れないように黒い『ほろ』をかけ東京では、空襲警報を出ている様子、ラジオからは日本が戦果を挙げているように報じられていましたが、本当は反対だったのです。大月の上空もB29がゴウゴウ音をたて編隊で通過することも多くなり、空襲警報のサイレンが鳴ることも多くなりました。

昭和二十年の三月、私は都留高女の入学試験を受けることになりました。しかしその勉強も燈下管制の中では夜おそくまで灯をつけていることができませんので、ただ頭の中で色々と考えていました。二十年三月七日入試当日、警戒警報や空襲警報が発令される中、防空頭巾と豆いりの入った袋を両方の肩にかけて、それも筆記試験は全然なく、唯口答試験だけの受験でした。その後も毎日警戒警報・空襲警報の連続で、夜もいつ防空壕に逃げなければならぬかという思いで結局着たままで床に横になっているという日が続きました。東京空襲の夜は、東の空が夕焼のように真赤になっていました。

都留高女に入学してからも毎日毎日が怖い気持ちで、でも新しいお友達も出来、4ヶ月程は不安と楽しさが一緒になったような…そして八月十三日を迎えました。いつも通りに登校する予定で家を出ました。上級生は先に登校してましたので一年生の私一人、強瀬から宮川写真館の前の坂を登ってあと五分で学校に着くところで警戒警報が出ました。一年生はその時点で家に帰ることになっていましたからすぐ引き返し興和航空のそこら辺で空襲警報になり興和飛行機の翼を作っていた兵隊さん達や学徒動員でいた人達と一緒に高月橋を渡ったところの松林の中に入っていました。敵艦載機の編隊が空に響きヒューンと下がるたびバババ爆弾の落ちる音と振動・機銃掃射のダダダ…と生きた心地はありませんでした。何とかして家に帰らなければ…とどの位の時が経ったかはわかりませんが、静かになったので夢中で家に急ぎ帰りました。しかし母だけはおりませんでした。弟に飲ませる山羊のお乳をもらいに駒橋まで行っていたのですが、家の者と一緒に村役場に勤めている二人の方も来ていて皆で心配していましたが、そのうちにまあ無事で帰ってきてほっとしました。それから又、飛行機の音がしたので押入れから布団を全部引っ張り出して何枚も重ねて積み、その下へ家にいた皆ともぐっていました。母の言うのに、綿は弾丸など通しにくいのでという理由だったようです。夕方には、うそのように静かになりましたが、敵の兵隊が来て殺されるかも知れないからというので家から1キロばかり離れた掘抜き横穴に隣りに産婦さんが入りました。

暗くなりかけた頃一人の産婦さんが産気づき、ここで生れては大変と母が付き添って自宅へ行き、その夜男の子の元気な赤ちゃんが生まれました。その夜は何もなく過ぎ翌日になって又、アメリカ兵が来て殺されるから山の中へ逃げたほうがいいとのデマが飛び、又皆で今の百合ヶ丘のところにあった杉林の中に逃げていました。

八月十五日は、ラジオで玉音放送があるとのことで、隣組の人達が家のラジオの前に集まり正座して玉音放送を聞き、終わると皆「日本は負けんだ。くやしい」と言って涙を流していたことを覚えています。

私は翌日学校に行こうと大月に出て見てびっくり余りの変わりように、町の中もスムーズには歩けず学校はケガチャメチヤ、そして進士病院のところまで行くと見ると玄関から足の踏み場もない程ケガ人が横たわり痛い痛い苦しい苦しいうめき声、それに看護する人達でそれこそ大変なことになっていました。音楽を教わっていた先生、多分校長先生もいられたのではないかと思います。学校は当然登校出来ず家のまわりなどの片付けや忙しく色々母に手伝ってやりました。よく調べて見ると裏の屋根に大きな穴があいていて、その下に灰色と黒の丸い物が五十センチ位土の中にめり込んでいました。不発弾だと大変ということで調べてもらいましたら爆風でとんできた川の石だったことがわかりホッとしました。段々色々の様子が変わり浅利に行く途中の岩にあった防空壕で大勢の人が機銃掃射で亡くなり都留高女の生徒も学校の前の壕の中で二十三人の上級生が、小遣いさんの御夫婦はこっぱみじんになってどび散り亡くなり校舎の真ん中と講堂・運動場とそれに林鳳山のまわりにはたくさん穴の爆弾が落下され桂川にも、又、岩殿の畑の中にも行って見るとすり鉢のような大きな穴があいていました。

都留高女では小さい物資を運ぶ為のパラシュートを学徒動員の生徒が縫っていました。興和ではベニヤのような木製の翼を作り、それを無蓋車に多数並べられていたのです。いやでも空襲されました。

主人は当時、都留中の3年で大月航空へ学徒動員で行っており、宿直室の基盤を頭にのせて窓から興和に爆弾の落ちるところや爆弾で建物が壊れて飛び散る様子を見たとの事です。又後は静かになってから町の中を歩いて悲惨な様子をしっかりと見たとの事です。私の実家のすぐ上の老夫婦も、おばあさんが目の見えないおじいさんの薬をもらいに出るのまもなく帰って、終戦二日前に隣組の人達で荒れた町の中を探しました。杉屋旅館の玄関に日本手ぬぐいを二日ぶらうつ伏せになって死んでいるのを見つけた。本当に可哀想でした。この様に多数の死者と被害者を出した終戦二日前の大月空襲、本当に悔しさと怒りで一杯です。しかし五分遅かったら学校に着いていた私、ほんの五分という短い時間の警報の出方によって命をなくす事なく今こうして皆様につなぐ経験ですがお話できていることを幸せに思っております。たった五分の違いで…

遺髪塚を訪ねて

小林敏江（高5回）

山梨県大月市の街はずれ 小高い山の麓にひっそりと建つ女学生の遺髪塚

終戦二日前の昭和二十年八月十三日この地にあった高等女学校が空襲を受けた。

学校は一瞬にして血の地獄と化し二十四人の女学生と職員が犠牲になった。

教師達は教え子の遺体を自らの手で火葬した。その直後に敗戦を告げる玉音放送が流れたという。

墓誌の中に私の七才年上の従姉妹の栄子さんの名前がある。夏休み中であったが学徒動員された生徒達は落下傘作りに連日登校していた。

その日は朝から「空襲警報」が発令され

通学列車を降りて家へ引き返す生徒も多かったが、最上級生の栄子さんは「責任があるから」と学校へ向かった。

土砂の中から救い出されて意識は戻ったものの、完全に聴力を失い一ヶ月後にみまかった。十六才だった。

かすかな記憶の底に揺れる従姉妹の面影は、すらりと背が高く涼しげな瞳をして、どこかコスモスの花を想わせた。

治療の手だてもなく死の床に伏した時、

「こんな私でも少しはお国のためになれたかしら」と聞こえない耳を傾け必死に問いかけたという。

遺髪塚に眠る少女達も同じ思いであったろう。少女達の思いは閉ざされたまま六十年もの月日が静かな墓に積もった。

真下に見える少女達の母校は、今は市立の短期大学と高校になっている。校庭のテニスコートには白いユニホームが舞い、下校する男女で賑わっている。

同じ地で学ぶ若者達は塚に眠る少女達のことを伝え聞いているでだろうか。

あの日のことを知る人は少なくなってきたが、

どなたかの心づくしの千羽鶴が塚に寄り添い、やわらかな陽差しが墓碑の肩を温めている。

今 私がか手向けた薄紅色のコスモスが秋風に揺れて・・・

ここだけが時の流れを堰き止めて静かだ。

じっと耳を澄ませば

あの日のままの少女達の声が聞こえる

—私達は少しでもお国のためになれたかしら—